

全英連埼玉大会参加報告

徳島県立城南高等学校 宇山公暁

1 はじめに

本稿は、11月15・16日に埼玉県で開催された第74回全国英語教育研究大会（埼玉大会）への参加記録である。本大会のテーマは「“シン・英語教育”～four skills から skill integration へ、そして competency の育成へ～」であり、目的は、グローバル化・高度情報化が急激に進展する変化と挑戦の時代を生きる児童生徒にとって必要な英語教育とは何かを、小中高の学びの観点から探るものであった。なお、ここで述べられている competency の定義は「単なる知識や能力だけではなく、技能や態度をも含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力」と、規定されていた。筆者なりにまとめるならば、これまで基本的には four skills（平成21年3月告示の旧学習指導要領では communication abilities）の育成を目的に行われてきた英語教育が、より広汎的な定義の competency の育成へと、その目標を変え、そのために日々の授業で何を大事にすべきなのかを示す大会だったと言えよう。

2 基調講演（1日目午前）

国立教育政策研究所初等中等教育研究部副部長・統括研究官白水始氏による講演が午前中に行われた。まず、センター試験における英語という教科の重要性・識別力の大きさは認められるが、逆に言えば、それは学習者が日常的に英語から隔絶された言語環境にいるということなのではないかと問題提起された。では、これからの言語教育はどうあるべきなのか、「シン・英語教育」で何をすべきなのか、という問いかけに、文化人類学的な観点と学習科学的な観点の2つからヒントを示した。文化人類学的な観点から考えれば、「対話しながら考える」教育、「自分の視点を言語を通して再吟味する」教育が有効ではないか、学習科学的な観点から考えれば、Scaffolding（足場かけ）と Authenticity（真実性）を備えた学びが有効ではないか、とそれぞれの視点から理論的なヒントが出された。

最後に、上記の理論的なヒントを「シン・英語教育」として実践するには何をすればよいのか、3つの実践案が示された。1つは、協同学習である。エキスパートグループとクロストークを活用した「知識構成型ジグソー法」が典型例であり、一人では十分な答えが出ない課題に対して、対話しながら考えることで four skills が統合される。2つ目は、CLIL（Content and Language Integrated Learning）である。例えば、国の気候に影響を与えている要因は何か、時計はなぜ時計回りに動くのか、など、児童生徒にとって新しい概念を英語で獲得する試みである。3つ目は、日本語と英語の言語文化的な比較である。例えば have を「所有する」という意味で捉えると違和感があるのはどういう場合か考えさせるなど、英語を学ぶ中で日本語の理解も深め、自分の見方・考え方を変える授業案が紹介された。

学習者が英語を日常言語だけでなく、学習言語としても使うことで、自分の見方・考え方を見直すことが、competency の育成に繋がるのではないかと締め括られた。competency の育成を目指した英語教育の、新たなスタンダードが示されたと感じた。

3 実演授業（1日目午後）

小中高それぞれの実演授業を参観した。小学校の授業では、ALTの要望に合わせた冬休みの旅行プランの提案とディスカッションが主なテーマとされた。本来ならALTとのTTで行われるはずだったが、ALTの諸事情による欠席で急遽JTEのみによる授業となった。簡単なパターンプラクティスの後、児童は5人一組のグループで、与えられたピクチャーカードとワードリストを活用して、どこがALTの条件や好みに合っているか、何をお薦めすればいいか、を話し合っていた。最終的にグループ毎に選んだ県のピクチャーカードを掲示しながら、“Let’s go to _____. _____ is a good place. We have three reasons…”と、発表することができた。しかし、ALTとJTEのモデルやり取りが一切無くなってしまった影響は小さくなく、エンゲージメントのコントロールが難しそうだった。

中学校の授業では、白水氏が講演で言及されていたジグソータスクがまさにテーマであった。教科書の題材をもとにした英文を4分割したものを、4人一組のグループで生徒が一人一箇所担当して読み、キーワードをメモした後、エキスパートグループで担当箇所の内容確認、元のグループに戻って内容を伝え合い、元の英文を復元する活動だった。後半には、復元した内容を、生徒が観客席の授業参観者たちに伝えるというスペシャルな活動も行われた。生徒が英文をre-tellingしようとメモをとる姿や、伝え合う姿はジグソータスクのお手本となった。筆者が気になった部分として、英文を読んでメモ・再生しようとする際の指示の最後が常に“Do not copy. In your own words.”であったことが挙げられる。今回の授業内容は、どちらかという最終的なゴールの「手前の練習」の要素が強く、「自分の言葉」でメモや発話を行うのはもう少し後の段階でやることではないかと感じた。むしろ、最終的なゴール活動に必要な知識・技能を習得するために「他人の言葉」で練習する段階、と割り切って考えればよかったのではないかと。

最後に高校の授業を参観した。教科書の内容理解を終えた後の、発展的活動が中心であった。これが見事な授業だった。授業の流れは何の変哲もないお手本のような、本文のレビュー→少数言語の役割→多数言語の役割→自分が少数言語話者であったらどうするか、をそれぞれ英語でワークシートに書き込み、発表、話し合うというものだった。教師の英語もいわゆる「等身大の英語」で、淡々と指示を出しつつ、決して無理をしないテンポで授業を進めていた。生徒に英語で話し合わせることもあがるが、このトピックは日本語と英語をミックスして話してもいい、ここは日本語で話していい、と、英語によるやり取りを強要はしていなかった。しかし、授業の最初から最後まで、生徒は自分から進んで英語で書き、英語で話し、ときには会場が笑いに包まれるような回答を英語で披露してくれた。印象的だったのは、「少数言語を保存するメリットは何か」という、決して簡単ではないトピックについて、教師が書かせる前の段階として日本語で話し合ってから考えるよう指示しただけなのに、生徒は書きたい欲を我慢できない様子で、即座にワークシートに自分の考えを書き始めた場面だ。難解なトピックに英語で表現することに対して、生徒が前のめりになっているのを見たのは初めてだった。いったいなぜ、このシンプルな授業構成がこれほど上手く機能するのか、不思議だった。その理論的な答えは、授業が終わった後の、指導助言者から示された。助言者によれば、①授業の中に Learning moment を作る②ワークシートを Thinking sheet にすること、の2つらしい。二日目の分科会で、なんとしても授業者と助言者からもっと話を詳しく聞きたいと期待が膨らみ、初日の日程が終わった。

ここからは余談であるが、偶然会場で居合わせた大学時代の同級生と、実演授業を見て話し合い、考えたことをもとに、ざっくばらんに感想を述べる。どの授業も英語による言語活動とタスクを中心

に据え、思考・判断・表現をテーマにした良い授業だったのだが、同時に、知識・技能に焦点を当てた授業が無かったことにささやかな疑問を抱いた。知識・技能の軽視とまでは言わないが、授業の中心にタスクありきで、思考・判断・表現が上位概念として扱われていることに違和感を覚えた。少なくとも本大会のテーマである **competency** の育成にあたって、英語に関する知識・技能が重要であることは言うまでもない。そうであるならば、良質な知識・技能の育成や定着を目指した授業実践が、こういった場で提供されることが、さらなる英語教育の発展につながるのではないかと感じた。

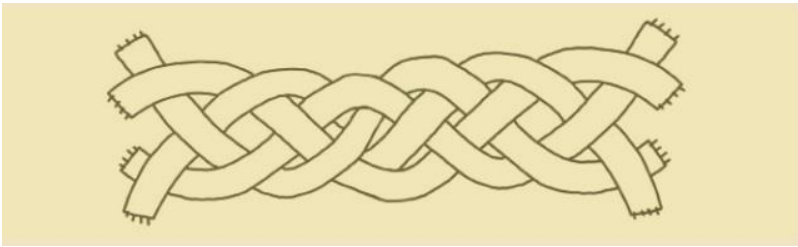
4 分科会（2日目）

分科会第一部では、第15分科会「教科書内容に向き合った言語活動と資質・能力の向上を目指した課題の設定」に参加した。発表者は、高校の授業実演を担当された埼玉県立伊奈学園総合高等学校の降旗康善先生、助言者は上智大学の池田真教授だった。まず降旗先生から、自分が日々の授業で大切にしていることが2点示された。1点目は、語彙習得の大家として知られるポール・ネイション (Paul Nation) が 2007 年に提唱した **The Four Strands** である。これは、授業中の言語活動をよりよくデザインするために、以下4つの **Strands** をバランスよく盛り込むべきだとされるものだ。(1) **Meaning Focused Input** (2) **Meaning Focused Output** (3) **Fluency Development** (4) **Language Focused Learning** の4つである。2点目は教育心理学者のベンジャミン・ブルーム (Benjamin Bloom) が 2001 年に発表した **Bloom's Taxonomy** である。Bloom は教育活動のレベルを認知領域の順に **Remember**→**Understand**→**Apply**→**Analyze**→**Evaluate**→**Create** とし、**Remember** から **Apply** までを **LOTS (Lower-Order Thinking Skill)**、**Analyze** から **Create** を **HOTS (Higher-Order Thinking Skill)** と分けている。降旗先生は、これらを援用して以下のようなチェックリストを作り、教材研究の時点で、これらがバランスよく埋まっているかをチェックしながら実際に授業で行う **Procedures** や **Activities** を計画している。例えば、授業の最初で **Review Question** を **Teacher Talk** を交えて行えば、生徒は教師の英語を聞き、それに英語で答えることによって **Listening** と **Speaking**、また、**Meaning Focused Input** と **Meaning Focused Output** を達成し、加えて教科書の既習内容を **Remember** する認知スキルを使うことになる。降旗先生の授業実演を思い出してみると、ほぼ全ての項目にチェックが入り、かつそれらの活動がシームレスにつながっていた。学術的な学習理論が背景にあり、それらを自分なりにアレンジして活用する授業作りのスキルに感服させられた。

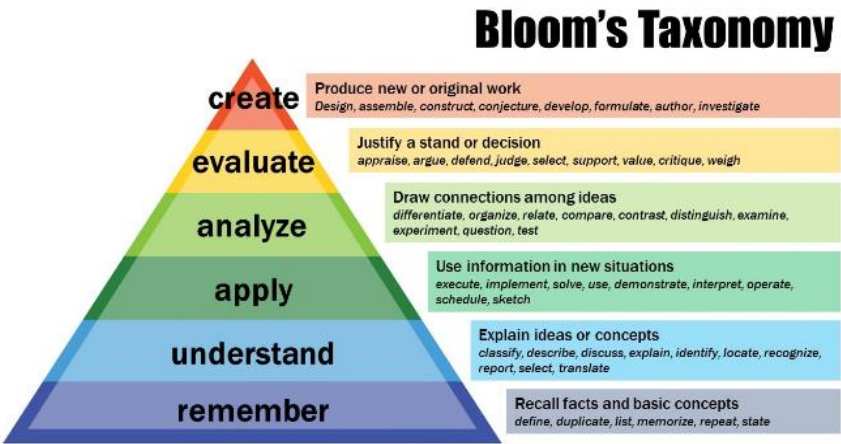
次に、上智大学の池田教授から、指導助言があった。まず前日にあった授業実演について、一番ハイライトとなったのは **learning global languages** と **preserving endangered languages** の対比だった。ここで生徒が、**protecting culture** など、言語に関する内容以外の新しい概念、考え方を英語で学んでいた。これが英語で概念を学ぶ **Learning moment** になり、それが **competency** に変わっていくのだという。また、ワークシートの役割についても触れられ、**organizing information** のためだけに作られているワークシートをよく見るが、それでは **Learning moment** は起こらない。ワークシートは思考を導くために用いるもの、対比したり、分類したりする活動、を生徒に促す **Thinking sheet** であるべきだと評された。最後に、これらからの英語教育のあり方について、20世紀では英語を話せたり、訳せたり、コミュニケーションに事足りればよかったが、今は違う。AIも普及した今、21世紀では、英語で **competency** を身につけることが求められる。そのために教師の **Authentic Intelligence** を大事にしてほしい、と締めくくられた。

生徒に何を、どう、なぜ身につけさせるのか、英語教育の **what, how, why** を、実践と理論の両輪

から解説され、非常に有意義な時間となった。また、会場からの「授業実演について、なぜシンプルな授業構成であんなに授業がうまくいくのか？」という質問に、降旗先生が言われた「場の力は影響したと思います。生徒の英語に、いちいち会場がリアクションを示してくれる。それが嬉しかったんでしょう。」という回答も、英語教師として大事な示唆となった。昨今、英語教育の授業検討会や、研究授業の反省会で、「目標に対して今日の授業内容が適切であったか？」という、いわゆるバックワードデザインに基づいたトピックをよく耳にする。しかし、日々の授業で、こちらが予期していなかったような生徒のパフォーマンスで、授業がうまくいく／いかないことは、英語教師ならば、ほぼ誰もが経験するであろう。ならば、授業が本時の目標に最短距離で向かっていたとしても、必ずしもいい授業とは言えないのではないか、そんな疑問が浮上する。学習理論、授業作りのスキル、**Learning moment** と **Thinking sheet** を作る、そこに場の力が加わったとき、初めて降旗先生の授業が出来上がった。英語教育が科学的だけではなく、人間的な営みであることを再認識した、分科会第一部となった。



Nation (2013)による The Four Strands のイメージ図



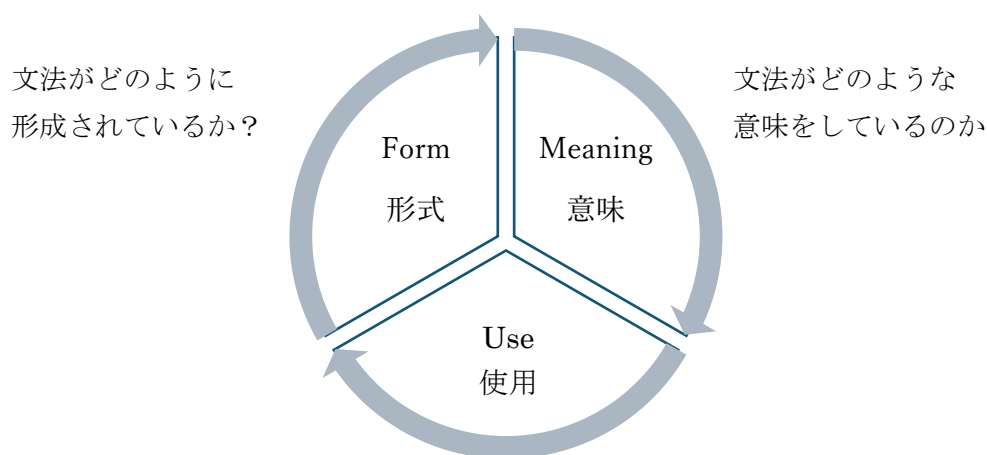
Bloom(2001)による Bloom’s Taxonomy (Cognitive Domain)

Procedures	Language skills				Four Strands				LOTS			HOTS		
	L	S	R	W	MFI	MFO	FD	LFL	R	U	A	A	E	C
1. Review Questions	○	○			○	○			○					
2. Discussion Questions	○	○			○	○						○		
3. etc.														

降旗先生による授業作りのチェックリスト

分科会第二部では、第19分科会「バックワードデザインを基にした生徒の資質・能力の効果的な育成につながる単元計画の研究～「主体的に学習に取り組む態度」がより発揮される授業実践を通して～」に参加した。発表者は、埼玉大学附属中学校の蓬澤守先生、助言者は埼玉大学の奥住桂准教授だった。蓬澤先生は、以前は従来型の PPP で授業を行っていたが、ある時から生徒の主体性が気になり始め、授業スタイルを TBLT に、それに合わせて単元計画をバックワードデザインに変更された。PPP と TBLT の定義や比較について、ここでは割愛するが、蓬澤先生の TBLT スタイルでユニークだったのは、単元の学習前にゴールタスクをまず生徒にやらせてみて、単元の最後にもう一度全く同じタスクに取り組ませるというサイクルだった。通常、TBLT を行う場合、プレタスクを帯活動でやらせたり、ポストタスクを用意したりするが、蓬澤先生は単元の最初と最後で全く同じタスクに取り組むことで、生徒の自発的な未習表現の学習や、既習表現の活用を促していた。具体的な単元計画は、1時間目にゴールタスクにチャレンジ→2～5時間目を使って、教科書の内容理解、この際ゴールタスクに使えるような表現をピックアップして重点的に指導→6時間目にゴールタスクに再チャレンジ、となっている。単元学習前後のパフォーマンスの様子も動画で示され、学習前には1分も話続けられなかった生徒が、学習後は7分以上も堂々と英語で自分の提案を発表することができた。TBLT を現場に根ざした形式で、生徒の主体性を意識した取り組みとして興味深く、こちらもこれからの授業作りの新しいスタンダードの一つになるのではないかと感じた。

指導助言者の奥住准教授からは以下のような指摘があった。まず、タスク先出しの利点として①目標の掲示によって、現在地の確認ができること。②新しい表現を学ぶ必然性や意欲が生まれること。③持っているリソースで戦うマインド、の3点が挙げられた。ここでは、②と③に関して具体的に説明する。まず、②について、タスク先出しによって、生徒が「既習の表現ではできないこと」を理解する。そこで、教科書で新しい文法や表現を学ぶことにより、「この表現を知っていれば、あのタスクできたのに！」と、生徒は文法の「使用(Use)」に着目して学ぶ。(使用(Use)に関しては以下の図を参照)そして、プラクティスの価値が高まる、という流れが出来上がる。③に関して、これは TBLT 自体の利点とも言えるが、精度を問わずにタスクの達成だけを目指すならば、生徒は既習表現を駆使することでどうにかできてしまう場合もある。これによって、「手持ちの武器で戦う」マインドが身に付く。



文法がどのように
形成されているか？

文法がどのような
意味をしているのか

文法がどのような場面で
どのような働きをするのか？

Larsen-Freeman's Three Dimensions (2003)

反対に、タスク先出しの懸念として①限界を自分たちで決めてしまう恐れ②失敗体験の功罪の二点が挙げられた。①については、筆者も全く同じ懸念を持ったのだが、生徒によっては単元学習前に「これをやれば十分」と認識してしまうことで、A 基準の先を目指さなくなってしまう恐れが考えられる。そうすると、単元学習への意欲が下がってしまう。対策として、A 基準を教師ではなく生徒に考えさせる実践が紹介された。②については、ゴールタスクを最初に失敗してしまうと、それ以降萎縮し、英語を話すことにためらいを覚えてしまう生徒もいる。ここに関しては、教師の **proactive** に見守る姿勢が大切であると、教師側のアプローチに言及があった。

PPP と TBLT の対比については、昨今よく目にするトピックであり、今後も英語教育界隈で論じられていくものであろう。その際、筆者が理解しておかなければならないと感じるのは、PPP も TBLT もあくまで CLT (Communicative Language Teaching) の一部であるということだ。すなわち、PPP であろうと **communication task** の概念は必要であり、TBLT であろうと **presentation** や **practice** の概念は必要である。では、それぞれの指導法が **competency** の育成という目標を共有するとき、一体どのようなスタイルが適切なのか、考えさせられる機会になった。

5 おわりに

今大会に参加して一番勉強になったのは、大会のテーマになっている **competency** の育成に、英語教育がどのように関わっていくべきなのか、という視点を得られたことである。そこで、先にも述べたことであるが、英語の知識・技能が、思考・判断・表現に先立って重要だと筆者は考える。1. はじめにで紹介した **competency** の定義において、「単なる知識や能力だけではなく、技能や態度をも含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、…」とあるように、知識や技能の習得が前提とされている。そうであるならば、高等教育段階の（または生徒によっては就職して社会に出る）前段階としての初等中等教育で、思考・判断・表現のアイデアや実践例だけではなく、知識・技能の、特に「育成」と「定着」に関する指導技術が発展すべきではなかろうか。

英語の授業は英語で、バックワードデザイン、四技能統合、パフォーマンステスト等々、様々な言葉が英語教育で生まれ、消費されてきて久しい。現場で英語教師をしていると、それらの言葉や現象に追いつくだけで精一杯になりつつ、自分の教えたことが何なのか、そもそも英語を教えるとはどういう行為だったのか、ふと考えるときもある。そんな中で、今大会のテーマとなった「**competency** の育成」は、最終的に英語を教えることを通じて自分が生徒の何を育成したいのか、それを大切にしていかなければ、と気付かされるきっかけになった。同時に、生徒の何を育成すべきなのか、という問いかけに、一つの答えを与えてくれるものでもあった。